

猫の肺

東京大学農学部獣医病理学教室出題 第38回獣医病理学研修会標本No.713



動物：猫，日本猫，雌，4歳。

臨床事項：1歳6ヶ月時に来院し，腎不全と診断される。以後，補液等により治療を行うが，1996年12月27日午前9時頃斃死。死亡後3時間で剖検が行われた。

肉眼所見：肺は乳白桃色を呈し，水腫様。左右後葉内部に砂粒状硬結部を触知したが，同部剖面は桃白色で均一であった。気管内には無色の泡沫液が貯留していた。肺以外では，左心室腔の狭窄，腎臓の萎縮，上皮小体の腫大が認められた。

組織所見：肺全域に，血管壁，肺胞壁を主座とする著明な石灰沈着が認められた。また，肺胞内には軽度から中度の炎症細胞浸潤と水腫，一部の間質にはリンパ球を主とする中度の炎症細胞浸潤がみられた。肺の辺縁近傍の一部には，巣状の紡錘形細胞増殖部が認められた(写真1)。この細胞の増殖により，間質は著しく肥厚していた。また，この細胞が肺胞内に充満している様な部分もみられた。増殖細胞は長

紡錘形で，楕円形～類円形の核を有していた(写真2)。核分裂像は認められなかった。紡錘形細胞は，マッソントリクローム染色で赤く染色された。免疫組織化学では，増殖紡錘形細胞のほとんどが α -smooth muscle actinに対して強陽性を示した。また，一部は，ActinおよびVimentinに陽性であった。Keratin, S-100, Desminに対しては陰性であった。

診断および考察：以上の結果から，本症例でみられた増殖紡錘形細胞は平滑筋細胞あるいは筋線維芽細胞と考えられた。二次性上皮小体機能亢進による石灰沈着や，尿毒症性肺炎に起因する何らかの機序によって細気管支や血管の平滑筋細胞あるいは肺胞壁の筋線維芽細胞が増生し，本標本のような病変が生じたと考えられた。組織診断名は，増殖紡錘形細胞が平滑筋細胞であるか筋線維芽細胞であるか判別が困難であるため，“尿毒症性肺炎にみられた限局性紡錘形細胞増生”とした。